

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">江崎 由里香 【人間発達科学専攻 平成25年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p style="text-align: center;">中学生における家族との共食と心理的ウェルビーイングとの関連</p>	<p>本論文では、従来の食育や健康心理学研究のなかで対象となることが稀であった中学生期における家庭での食生活と心理的ウェルビーイングとの関連をテーマとして取り上げ、食事場面で行われる家族との相互交流によって形成される共食感に注目して、2 つの実証的研究から両者の関連メカニズムについて検討がなされた。研究1では、岐阜県内の公立中学校の生徒 160 名を対象とした 1 週間の朝食および夕食に関する食生活ダイアリー調査から、家族との共食頻度の平均値が朝夕 14 回中 2.31 回となるなど家族全員との共食が難しい中学生の現状が示された。また日誌で得られた数値データをもとに共食感形成に関する探索的な重回帰分析を実施し、食事時の家族での会話頻度が共食感と有意な正の関連を持つこと、また食事の手伝いに中学生自身が参加することや共食人数、献立数が食事時の会話頻度を増加させることも明らかになった。研究2では、同じく岐阜県内の公立中学校の生徒 469 名を対象に、研究1で示唆された探索的な共食感形成プロセスモデルを用いて、心理的ウェルビーイング（生活満足度および抑うつ）との関連性に関する仮説モデルを構成し、短期縦断的調査によって検証をおこなった。各変数に影響を及ぼす可能性のある人口統計学的変数と家族関係を統制して分析した結果、仮説モデルについて高い適合度が得られ、食生活要素のひとつである共食人数が食事時の会話および共食感を媒介して、心理的ウェルビーイング（生活満足度および抑うつ）に関連することが示された。また、1 人以上との共食回数別に共食感得点の比較を行ったところ、共食回数が朝食・夕食 7 日間 14 回中 3 回以下の群は 4 回以上の群よりも共食感得点が有意に低いことが示され、家族全員との共食が難しくても誰か 1 人と週 4 回以上一緒に食事をするすることで共食感がより高まる可能性が示された。</p> <p>以上の結果から、心身ともに大きな成長発達を遂げる中学生期において家族との共食が心理的ウェルビーイングと関連することが明らかになり、今後の食育政策の見直しに有効な示唆を与えるとともに、ワークライフバランスの観点から家族での食事を実現する働き方を促進するエビデンスのひとつが得られたと考えられる。</p>
審査委員	<p>(主査) 教授 菅原 ますみ</p>	
	<p style="text-align: center;">教授 大森 美香</p>	
	<p style="text-align: center;">准教授 上原 泉</p>	
	<p style="text-align: center;">教授 石口 彰</p>	
	<p style="text-align: center;">准教授 富士原 紀絵</p>	